

経営と健康



日本史を彩った女性たち 第一回

「光る君へ」紫式部

講談師

一龍齋貞花



千年の時を超えるベストセラー

「源氏物語」光源氏の恋愛物語を書いた紫式部が今年の大河ドラマの主人公。11月1日が古典の日。日記に源氏物語が書かれたのが、今から約千年前の寛弘5年（1008）11月1日ということから、日本の古典を顕彰する記念日として2012年9月5日に制定された。

京都大徳寺の塔頭真珠庵に式部の産湯の井戸があり、四方を石で囲った古い井戸、拝観しました。寺内にあるので説明を聴かなければ判りません。

墓所は、京都市北区北大路堀川下る西側の細い小道を入っていくと式部と小野篁たかむらの墓が並んでいる。

滋賀県大津の石山寺に7日間参籠をして、8月10日15夜の月が瀬田川（琵琶湖）に美しく映えるのを見て筆を起

したと伝えられ、「今宵は15夜なりけり」と書き初め、石山寺に紫式部供養塔と紫式部像があります。

宮中の高貴な女性が、光源氏の女性遍歴、男性にとって源氏の君は、在原業平と共に羨ましい存在です。

式部の父は、式部大丞藤原為時で家柄のわりには出世出来なかつたという。父から漢籍を学んだが、その聡明さは兄をしのぐほど。28歳の時山城守藤原宣孝と結婚、晩婚ですね。

式部は健康食として鰯を好んで食べ、当時は肥料や飼料にもなった下等な魚で、夫が「鰯なんか食べるな」と言うのでこつそり食べていると、夫が勤めから早く帰ってきて食べているのをみつき、そこで焼いて夫に食べさせたら「美味

じゃ」と言つたという逸話がある。夫宣孝が結婚4年足らずで死去。死後5ヶ月程たった秋ごろ「源氏物語」を書き始め、その才女ぶりを聞いた摂政藤原道長に乞われて、娘の一条天皇の中宮

彰子のもとに仕え宮中に勤めるようになります。源氏物語を書くため出仕と退出をくりかえし、出仕すると待ちかまえたように書き上げたばかりの物語を、道長や彰子や宮中の女性たちが廻し読みをしたと、「紫式部日記」に満足げに書かれていると申します。宮仕えをやめたあともその才能と知識に一条天皇からほめられ「日本紀の御局つぼね」と仇名されたほどであったという。47〜49歳で亡くなったといわれ源氏物語54帖三部構成と一大長編のところから全部書いたかどうかという意見もあるといわれ

ている。御所のそばの盧山寺ろざんが邸跡となにしる平安朝の昔、大作家だけにいろいろ作られた話もあることだろう。

ライバル清少納言

紫式部の仕えた中宮彰子や、その父の道長が、清少納言の仕えた皇后定子やその兄伊周と対立していたので、主人同士の対立が部下同士も強いライバル意識を持った。

清少納言は、歌人として第一人者だが身分は中級の藤原元輔の娘。天皇の秘書官長ともいうべき藏人頭くわうとくかしら。美男で才能優れし全女性憧れの藤原齊信から求愛されるも、身分が違う。もし契りを結んだとて正式な妻になれる筈もなく、妻の一人になるくらいならと同じ身

分の橘則光と結婚し男子を産んで間もなく離婚し、少納言藤原信義と再婚し一条天皇の皇后定子のもとに出仕。七年間ほど勤めこの間の主人定子の宮廷の様子を書いたのが「枕草子」わが国最古の随筆。

「春は、あけぼの。ようよう白くなりゆく山ぎは、少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる」

ご存知の書き出し、曾祖父清原深養父は中古三十六歌仙のひとり。父元輔は梨壺の五歌仙のひとりとして「後撰集」の選者という和歌の名門。

鴨長明の「方丈記」、吉田兼好の「徒然草」と並んで「枕草子」は日本三大随筆と称され、「枕草子」の中で、「夜空の星の中で一番美しい星はすばる」と書いている。

枕草子より故谷村新司の「昴」の方が身近ですが、ともあれ平安時代の二大女流作家の対立がドラマの中でどう描かれるかも楽しみです。

源氏物語熱狂的愛読者

菅原孝標女

孝標女誰れ？ 名前だけではピンと

こないが、「更級日記」の著者と聞けば作品名を聞いたことがある方が多くありましょう。

執筆中から源氏物語を読む人多くあり、現在も源氏物語に挑戦する作家が多くあります。

母や姉が宵のひととき、光源氏のことなどところどころ語るのを聞くと読んでみたくなった。

「更級日記」の書き出し

「あずま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人・・・」

東国の道の果てよりさらに奥に生まれ育った私は、教養のない身ながらどういうわけか、世の中に物語のあるのを知り、なんとかして読みたいと思っていた。13歳の寛仁4年（1020）9月、父が上総介（千葉県中部の次官）の任期を終え、京へ戻ることになった。12月に京に入るまで東海道の景色や人々の様子などを書き始めたのが「更級日記」

父は官吏で常陸（茨城県）に赴任することになつても京にとどまり源氏物語を読みふけた。

やがて宮中の女官になり、33歳の時父と同じ中下級貴族橘俊通と結婚。38歳の時紫式部が源氏物語を執筆した石

山寺に3日間お籠もり、その後東大寺や長谷寺（奈良）に詣でたが再び石山寺に参詣。51歳の時夫が病没。その火葬の煙をはかなく思いその後もお寺参り。こうして13歳から約40年間の思い出をつづった回想記「更級日記」を52歳か53歳の時書き終えた。

題名のさらしなとは、「おぼすて」の枕詞。夫亡きあと孤独な老婆の境遇の中で書いたといわれている。

宮仕えをし、光源氏、薰大将、夕顔、浮舟にあこがれたものの従五位上信濃守という中級官吏との結婚。いい人であったが、源氏物語とは違うこの世ははかないと悟りそれが、うばすての「更級」と題名をつけたのでしよう。

源氏物語を読んであこがれの宮中に勤め高貴の人と結婚を望む女性。いつの世も変わりありませんね。

「黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき」

黒髪の乱れることも忘れて、うつぶせになつてみると、黙つて乱れた髪をかいとくれた人が恋しい。

情熱的抒情詩人といわれる和泉式部の歌。

関白藤原道長の栄華をきわめた事実を描いた有名な「栄華物語」を書いたといわれる赤染衛門。歌人として和泉式部と特に親しい間柄で「百人一首」にもおさめられている。

「やすらはで寝なましものを小夜更けて 傾くまでの月を見しかな」

この歌は妹の馬内侍のために代作したものとされるが、百人一首に赤染衛門とあります。

平安朝には多くの女流歌人、作家が輩出。なにしろ恋文のやりとりも和歌、どんな美男子でも歌がうまく詠めなければ女性にもてなかつたというんですから、私は今の世で良かったと思つていきます。

日本史を彩った女性を紹介して参りたいと思います。おつきあい下さい。

